

(01.09.06)

酷暑の夏、急来の秋、待ったなしの大学独法化

高部英明

皆さん、今年の夏は「あつい、あつい」の毎日ではありませんでしたか？ 名古屋の友人が「知床に行って来たから」と、「みみかき」のおみやげをくれました。我が家は受験生を二人抱え、それどころではありませんでした。一週間の夏休みは、小泉流とはいきませんが、家でごろごろ寝たり、本を読んだり、ビデオを見たり。それと、久しぶりに教科書を半分ほど読みました。「星の進化」の専門書。勉強していると自分がイマジネーションの世界に舞い込んでいるような快感を覚えます。久しく忘れていた感覚です。

映画では、旧ソ連のノーベル賞作家、パステルナーク原作の「ドクトル・ジバゴ」を見ました。革命という大義の中に「個」の運命が翻弄されてしまう。ロシア的悲劇の作品です。パステルナークはノーベル賞を受賞したものの、政府からは「作品は反革命的である」と迫害を受けたそうです。そして、不遇の内に逝ったとのことでした。新潮文庫から出ていたこの作品は現在絶版。市立図書館で取り寄せて読み始めたところです。映画は小説のほんの一部しか表現できません。活字を追いながらロシア文学にこの秋は浸ってみようかと考えています。

皆さんもお聞きと存じますが、レーザー研では阪大の独立行政法人化（平成16度か15年度から）に向けて研究計画の作成、そのための議論の最中です。意見は2局に分かれており「5年で60億の予算で高速点火加熱の実証をし、10年、220億で点火の実証をする」という威勢の良い計画と、「大阪大学に残り、高強度レーザーを用いた先端科学を切り開く」というものです。8月3日には決裂状態でしたが、その後、組織まで考えて2局の研究が共存できるような提案が出され、議論は、組織論を含む具体的な内容に進展しています。

以前書きました、「変化はチャンス」の捉え方。従来の延長、枠組みでしか物事を考えられない人は、世の動きから取り残されて「化石」になって行くだけです。大胆に、しかし、関係者との話し合いを十分した上で、研究者の意向が十分生かされ、日本のためにより良い新しい「仕組み」を作っていく義務が我々、文化人には課せられています。「独法化」という革命の大義のもとに「個」の運命が翻弄されるような悲劇的な不条理が許されないことは、ソ連の崩壊から大いに学んだ所です。歴史の悲劇を繰り返さない賢明な研究計画に仕上げたいと考えています。

最後になりましたが、所内版再開です。原稿皆さん書いて下さいね。楽しみにしています。